



I-OWA マンスリー・セミナー講演より お金の過去・現在・未来(3)

講演：岡本 和久
レポーター：赤堀 薫里

3回に渡って、お金の過去・現在・未来の話をしてきました。お金は、ものの価値から国、権力の価値に変換がずっとおこっていきました。明治になってグローバル化の中で新貨条例が定められ、1両=1ドル=1円という非常にわかりやすい関係が決まり、それが続いていきます。

一番大きな出来事だったのが、日清戦争です。戦費の総額が2億1000万円だったところに、賠償金3億6000万円弱のお金が入ってきたことは大きかった。それまで日本に銀はあったけれど、金はあまり持っていなかったのです。1870年代から銀が世界的に生産されるようになり、銀の価値が下がってしまったために、日本は非常に不利になっていました。しかし、日清戦争の賠償金で金本位制になることができました。残りのお金で軍備の拡張や、製鉄所の建設、鉄道の施設、電信電話施設といったものを整備することができました。

次の大きな出来事が日露戦争です。この時は米国に仲裁してもらった形で戦争を終結して、一応、勝ったかたちになったけれど、ロシアの方は、それほど負けたという意識がなかった。戦費は、日清戦争の8倍。17億2千万円という大変な額が掛かったのに賠償金がなかった。この17億2千万円の82%が国内外の債券の発行で賄われていました。ポーツマスで講和条約が結ばれましたが、償金がなかったということで国民は怒り、その日に国民大会が行われ、暴動が起きました。



次に起こったのが1914年第一次世界大戦。この時は欧州の生産設備が破壊されてしまったために、日本からの輸出がものすごく伸びた時です。特にヨーロッパは食糧不足でした。日本はどんどん輸出します。運賃の収入も入ってくるうえ、輸出代金の収入もあり、日本にとって非常にありがたかった。そのかわり国内では食料が不足し、飢餓にあえぎながら輸出にまわして儲けたのです。まさに「飢餓輸出」。漁夫の利とよく言われています。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

ただ、第一次大戦が終わると、日本は限界供給者だったため、欧州の生産能力が戻ってくると一度に打ち切られてしまいました。結果として苦しい反動不況、反動恐慌が起こったのが1920年くらいです。かなり多くの企業が非常に苦しい状態になります。

第一次大戦で漁夫の利、終戦で反動不況が来た。そんな時に関東大震災が起こります。1923年大正12年9月1日。だいたい国の富の損失が、当時の100億円と言われていました。190万人が被災して10万5千人が亡くなった、あるいは行方不明になりました。

関東大震災で、ほとんどの関東の銀行の建物が潰れてしまいました。手形も落ちなくなったので、30日間支払いを延期してよいというルールを作り、9月7日にモラトリアム支払い延期令、27日に震災手形割引損失補償令が出ています。関東地区で被災した銀行が所有する手形は日銀が再割引をして、万一そこで損失が発生した場合は1億円を限度として国が面倒を見ましょと、特別の補償令を出しました。震災手形の流通額は4億3千万円と言われていました。そのうちの相当の部分は、反動不況で倒産寸前の企業の（震災と関係のない）手形を、全部、入れ込んでいました。純粹に震災でやられた手形に比べ、はるかに大きな額が不良貸しとして出てきてしまった。これが次の金融恐慌の問題を大きくしてしまっただけのことになります。震災の4年後、1927年に金融恐慌が起こります。

このあと講演では、金融恐慌のいきさつや、第一次世界大戦後、非常に明確になった国際的、国内の格差の拡大についての解説。その後、統制経済の時代に入り、ついに太平洋戦争が勃発し、戦争に負けて終結。インフレ発生と預金封鎖、財産税、株式取引で預金封鎖破りについての解説。

後半では、お金と通貨制がどのように進化してきたか、また50年後100年後にお金はどのような形になっていくのだろうか解説くださいました。最後に「従来のお金が資本主義を支配し続けるのか、新たなお金が台頭するのか、これからが楽しみです。今、世界の通貨制度は非常に大きな局面に入ってきている。何百年に一度の大きな変革期にあるのかもしれない」と結ばれました。